

<研究会報告>

第43回 例会報告

1999年6月5日（土）に、本会の第43回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた大杉昭英氏の講演と、村野光則氏の報告の要旨は以下の通りである。

新しい公民教育の理念と展望

大杉 昭 英*

新中・新高等学校学習指導要領が告示され、21世紀初頭に行われる公民教育の内容が明らかになった。今回の改訂では、中学校社会公民的分野や高等学校公民科各科目で共通に見られる改善のポイントとして、社会的事象に対する見方や考え方や公正な判断力の育成を重視した点を挙げるができる。これは、変化するこれからの社会に主体的に生きる力を育てる今回の改訂の趣旨に沿ったものである。ここでいう見方や考え方とは、社会的事象（政治や経済の諸事象など）関連や本質をとらえ説明するための概念的な枠組みと考えることができる。そしてこの枠組みは、「個人の尊厳」「基本的人権の尊重」「公立」「公正」「対立」「強調」など、政治や経済の諸事象をとらえるための基本となる概念や理論によって形成されることによって、よりの確に社会的事象をとらえることができるであろう。また、公正な判断力を育てるためには、様々な立場やいろいろな意見があることを理解しながら、生徒自身の考え方を批判的に吟味しながら判断させることが必要となろう。

このような見方や考え方や公正な判断力をよりよく育てるため、中学校社会公民的分野では、高度経済成長から現在にかけての社会との変化や世界との結び付きをとらえ、現代社会の特色をつかむとともに、個人と社会とのかかわりの中で現代の政治や経済を支え動かしている基本的な考え方を理解し、さらに将来のよりよい社会を築くために解決すべき課題を考察させるようにしている。いわば近い過去、現在、近未来という時間軸にそった形で内容を示している。また、高等学校では課題追求的な学習を大幅に取り入れるとともに、問題を分析し課題解決に向けて考察するための概念や理論を学習するようになってきている。いずれにしても、見方考え方や公正な判断力を中・高等学校の公民教育において連続的に成長させることを目指して改善を図っている。

*文部省教科調査官

授業におけるGWT（グループワークトレーニング）の活用

村野光則*

グループワークトレーニング (GWT)は、もともと、企業の新人研修用に開発されたもので、5～6名のグループに一人では解決できないような課題を与え、課題の取り組みを通してグループ活動における個人のあり方を学習するものである。GWTは目的に応じてさまざまな財(ゲーム)があり、それらを効果的に利用することで、グループ活動に必要なさまざまなスキルを習得させることができる。

私は授業で「コンセンサスを得るためのGWT」をよく利用するが、その基本的手順は、「個人で考える→グループのかくのメンバーで考えを出し合う→グループで討論し、グループとしての結論を出す」というものである。結論は多数決ではなく、グループのメンバー全員の合意が条件となる。こうしたGWTを数回実施することで、明確に意思表示することの大切さ、リーダーシップのあり方、時間管理の重要性、自分の考えを相手にわかりやすく伝えるためのコミュニケーション技術等を体験的に学習することができる。また、GWTは常にゲーム形式で行われるため、生徒は楽しみながらこれらの学習をすることができる。

このようにGWTにはさまざまな利点があるが、GWTはあくまでグループでの討論や合意形成のためのスキルの学習であり、GWTを実施すること自体が目的なのではない。

脳死・臓器移植、遺伝子診断・治療、出生前判断、安楽死と尊厳死等、現代社会には「正解」のない問題が山積している。こうした問題に取り組む場合や、いまだに解決策が見出されていない現代社会の諸問題に組む場合、その前段階としてGWTを導入することで、授業においてグループ討議をスムーズに進行させることができグループの力を有効に活用していくことができると思われる。

*お茶の水女子大学附属高等学校